

地域を基盤としたソーシャルワーク

社会福祉法人三矢会
障害者相談支援事業所 リガーレ
所長兼主任相談支援専門員 一丸善樹

科目のねらい

- 本人の地域生活を支援する上で必要となる個別支援と地域支援の一体的展開と具体的方法について理解する。

学習のポイント

- 地域を基盤としたソーシャルワークの意義と機能
- 自立支援協議会の活用と展開
- コミュニティ・ソーシャルワークのプロセス

1. 地域を基盤としたソーシャルワークとは

(1) 地域を基盤としたソーシャルワークの意義

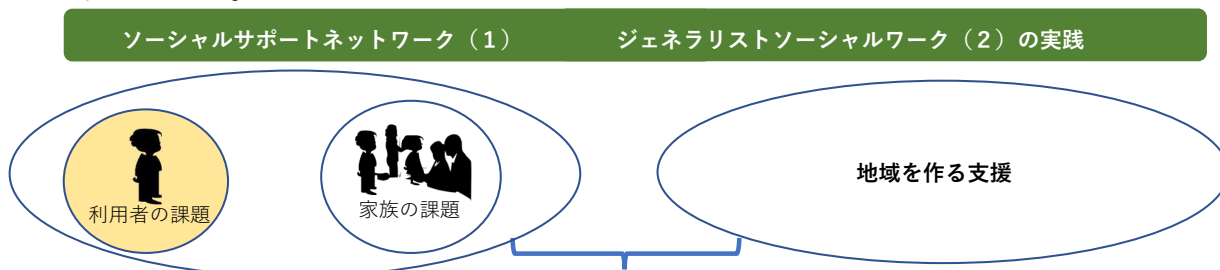
◎なぜ、地域を基盤としたソーシャルワークなのか？

皆さんも経験していると思いますが、

相談支援の利用者＝地域の生活者（地域の構成者）であり、利用者の課題等を確認していくと、それは利用者個人だけでなく、その家族も何らかの課題を抱えていることが多い。（当然ながら、家族も地域の構成者）



このような場合「利用者やその家族にとっての生活のしづらさは」様々かつ複雑な課題を含んでいるため、個別支援だけで安心安全な生活を保障することは難しいため、個別の支援を進めつつ、利用者が生活する地域を作る支援を並行して行う必要がある。



個を支える援助と個を支える地域をつくる援助を一体的に行うことで、課題解決を図る

※（１）（２）はテキスト109、110ページ参照

3

(2) 個別支援と地域支援の一体的展開

◎相談支援専門員の業務を極々簡単に整理してみましょう！

●アセスメント ➡ ●想いを聴く ➡ ●最適な方法を見出す ➡ ●エンパワメントにつながる社会資源を適用すること

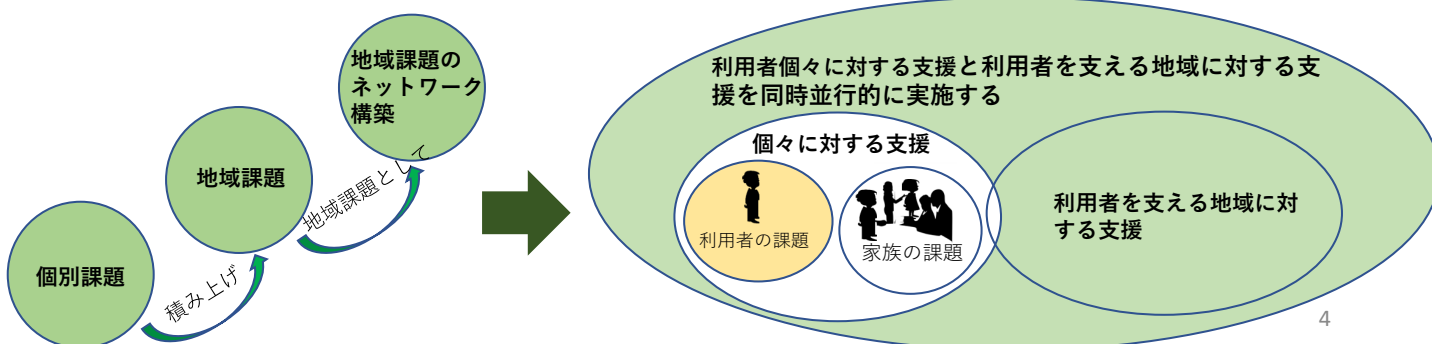
↓ところが、こんなにうまくいくことばかりじゃないですよ

例えば *本人の意思が確認できない
 *支援を受けていることに拒否的あるいは周囲に対し攻撃的
 *家族も含め、周囲の人も本人との接触を避けている など

こういった事案に対して、相談支援専門員がいくら孤軍奮闘しても対処することは難しい。（皆さんも経験が絶対にあると思います）解決の糸口と方法を見出すためには、地域の理解と協力がなければ、いくら個別事例だからといって協議会で議論してもおそらく解決には至らないと思います。

【従来型ネットワーク構築】

【個別支援と地域支援の一体的展開】



4

◎それではここで、テキスト110ページの真ん中あたりから、「個別支援と地域支援の一体的展開」の具体例が示してありますので、30秒時間を取りますので、しっかりと読んでください。

具体的に例をあげよう。ひきこもりの状態にある20代のAさんの母親が・・・

「個別支援と地域支援の一体的展開」について、イメージが出来たのではないかと思います。

この場面を振り返ると、相談支援専門員は母親のアセスメントの際に**地域の資源である同級生の存在をキャッチ**し、その**資源を動かして母親の変化を引き出している**。この**さりげない母親の言葉を逃すことなく**母親のソーシャルサポートネットに結びつける視点が大切だということがわかると思います。

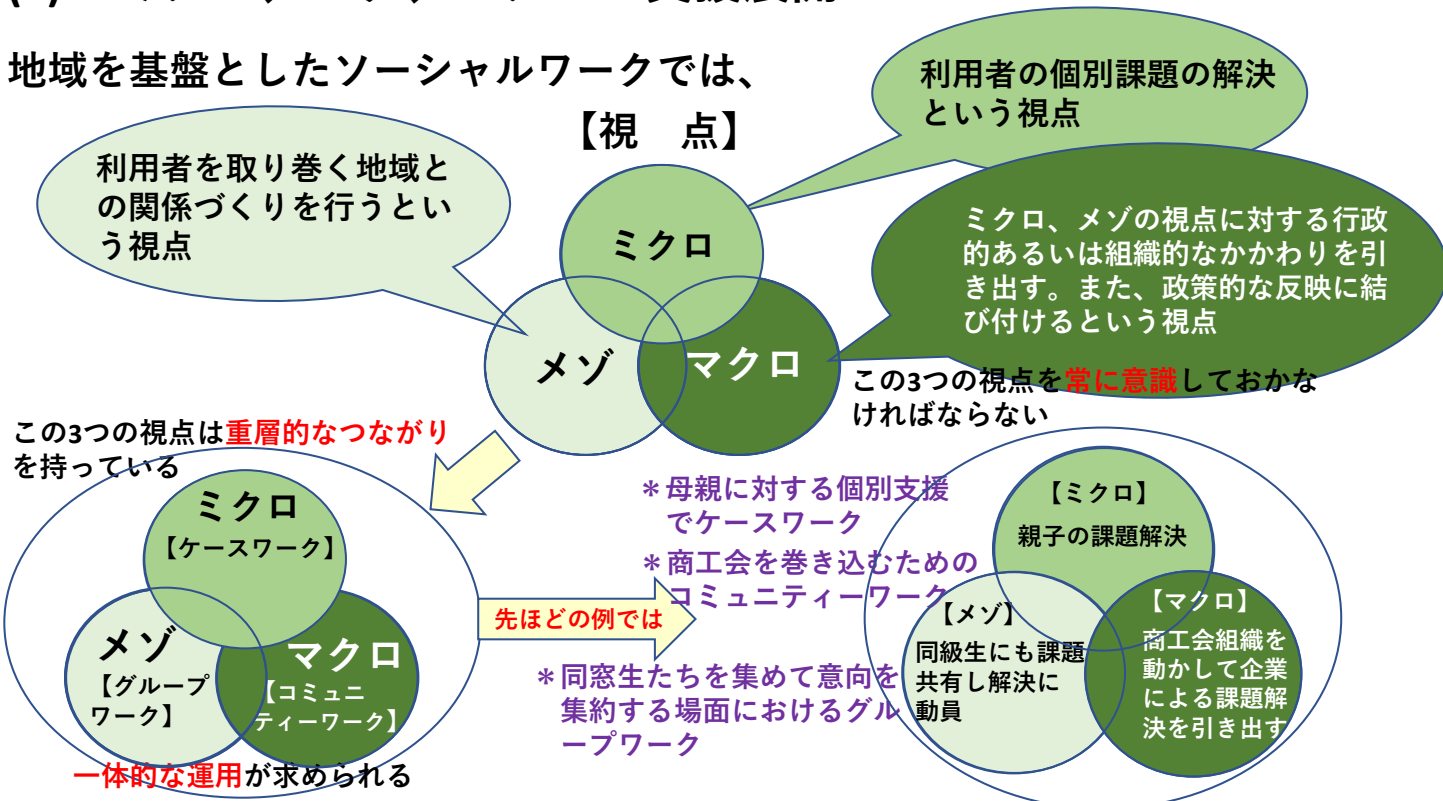
【相談支援専門員（ソーシャルワーカー）として、重要なことは？】

- ・ 社会資源は無量大であることを理解する。（あるものすべてがその人にとって、有効な社会資源となり得る。）
- ・ 何気ない会話や、些細な表情や行動から出されるサインを見逃さないという意識。

(3) ミクロ、メゾ、マクロの支援展開

地域を基盤としたソーシャルワークでは、

【視 点】



このように複数の支援技術を使いこなし、個別の課題を糧にして地域変革を起こしていく背景は、制度が当てはまらず対応が困難となっている事案が顕在化してきたことがある。計画相談が定着してきたこともあると思うが、皆さんもこうした事案に遭遇することもあるのではないのでしょうか？

でも、相談支援専門員は「できません」では済まされません。私たち相談支援専門員は、**ケアマネジメント（個別支援）を基本技術としながら、コミュニティー・ソーシャルワークの技術の習得をすることで地域における支援を完結できる力を身に付ける必要**があります。

(4) 自立支援協議会の活用及び展開と地域づくり

自立支援協議会は地域を基盤としたソーシャルワークを展開するうえで欠くことのできない「協議の場」である。

図2-5 ケアマネジメントの流れと自立支援協議会

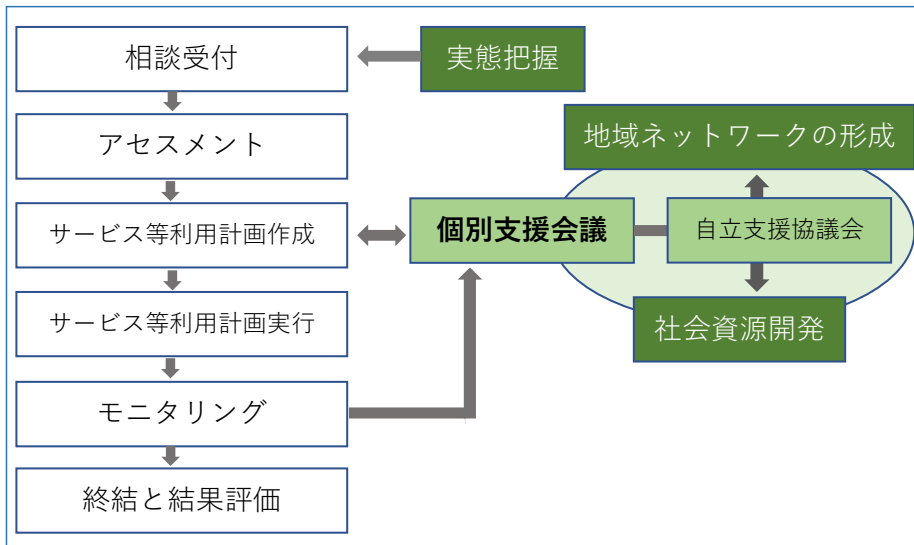


図2-5の左側の縦の流れと、個別支援会議から自立支援協議会、そして社会資源開発や地域ネットワークの形成へとつながる右側の流れは密接に結びついて、分けたり切り離したりできないものであることを理解しておく必要がある。

この左右をつないでいるのが**個別支援会議**であり、個別の課題を地域の課題として**並行して解決していくための、最も重要なカギ**であり、

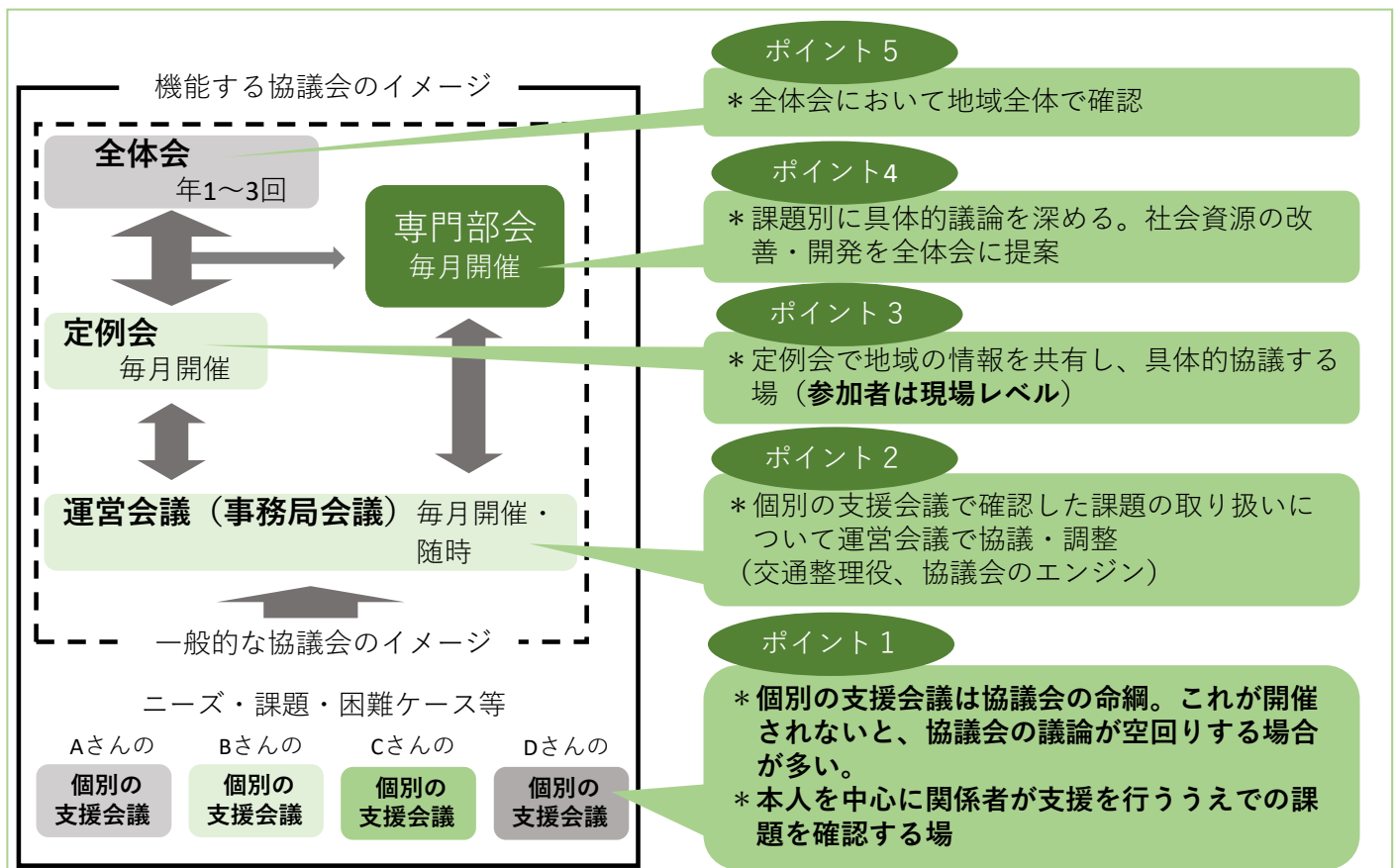
出典：「相談支援従事者研修のプログラム開発と評価に関する研究（研究代表者：小澤 温）」平成28年度～29年度総合研究報告書、39頁を一部改変

個別支援会議の内容が不十分だとそこから制度や地域の対応に関する課題が明確にならず、自立支援協議会の運営会議や専門部会での協議も不完全なものとなって、課題解決が進まなくなる（図2-6）。

私たち、相談支援専門員として、改めて個別支援会議の重要性を認識する必要があるのではないのでしょうか

7

図2-6 自立支援協議会機能と役割



出典：厚生労働省資料

あくまでも、一般的な協議会イメージです。各市町等の状況により、形は違うかもしれませんが、原則の協議会運営の考え方やポイントは同じでなければなりません。皆さんの地域の協議会は、この原則に則って、協議会運営がされていますか？そして、活性化しているのでしょうか？

8

● 個別支援会議の持つ機能、円滑な進行の準備及び本人への配慮について

【機能】

- ① 地域の諸情報やお互いの関係性を確認する情報共有機能
- ② 地域の支援力を高めるための役割分担と調整を行う調整機能
- ③ 地域資源の開発や改善を行う開発機能
- ④ 個別支援会議のメンバーや関係者のモチベーション向上や資質の向上の場とする教育機能

【準備】

- ① 会議を構成メンバーは、利用者本人、家族、支援にかかわる福祉サービス事業所に加え、利用者の課題解決に重要な役割を果たす地域資源（地域の自治会や住民、事業者、関係者など）を集めて開催する。
- ② 相談支援専門員は、会議の趣旨・目的をあらかじめ説明しておく。また、特に重要と思われる本人、家族や地域住民には会議の流れも含めて理解してもらえるように準備をする。

【配慮】

- ① 会議の場面では相談支援専門員は本人の近くにいて、会議中の専門用語の説明をしたり、発言者に対し、本人に理解しやすいよう説明するように指示をするなど本人の権利擁護を図るように全集中する。
- ② 常に参加者が本人に対して言葉を発するように促し、会議中に本人の自己肯定感を維持するように配慮する。

【自立支援協議会の機能】

情報機能	・ 困難事例への対応の在り方や情報を共有する機能
調整機能	・ 地域の関係機関によるネットワークの構築 ・ 地域の支援力を高めるための役割分担と調整を行う機能
開発機能	・ 地域の状況を診断し、社会資源の開発、改善する機能
教育機能	・ 協議会構成員や関係者の資質の向上の場としての機能
権利擁護機能	・ 権利擁護に関する取り組みを展開する
評価機能	・ 中立・公平性を確保する観点から、委託相談支援事業者の運営評価

◎個別支援会議だけでは解決が難しい地域共通の課題や制度の改善を要する点は、自立支援協議会に提案する。

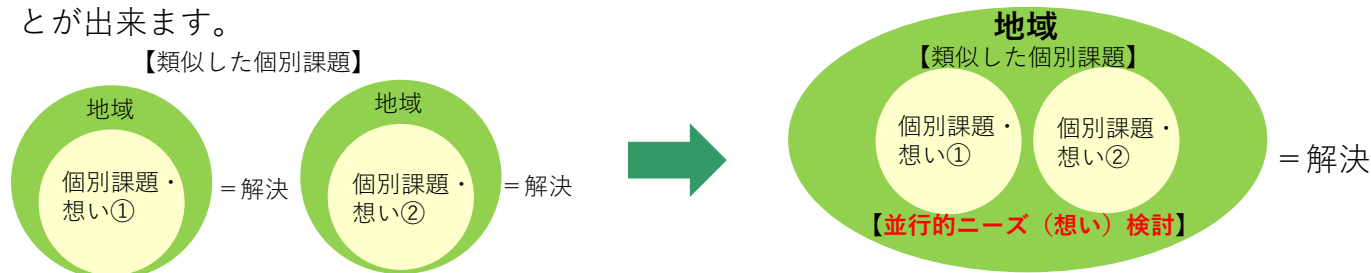
※個別支援会議の活性化のチェックポイントは、テキスト113頁、表2-7にまとめてあるので、参照してください。

2. 地域を基盤としたソーシャルワークのもつ機能

(1) 並行的ニーズ（想い）検討機能

皆さんが相談支援を実践する中で、その人の個別的課題や想いは、その他でも似たような課題や想いがあるという経験をした相談支援専門員がほとんどではないでしょうか。

そのような場合は、個別課題や想いを地域的課題としてとらえ、それらをバラバラに検討せず、共通の手段や資源を活用し解決していくことが、重要であり、より効果的に解決を図ることが出来ます。



上の図のように、地域のなかで個別の課題を解決するときは、**類似の課題にも着目し、両課題の背景の共通点に着目**して、同時並行的に検討をしていくことで、**本人と地域との接点**を増やし、地域住民等の参画を高めて、より協働的な関係のなかで解決を図ることが出来る。

※具体例は、テキスト114頁参照してください。

【並行的ニーズ検討を可能とする技術】

① 個別課題と地域課題を関係づける発想（個別課題 ↔ 地域課題）

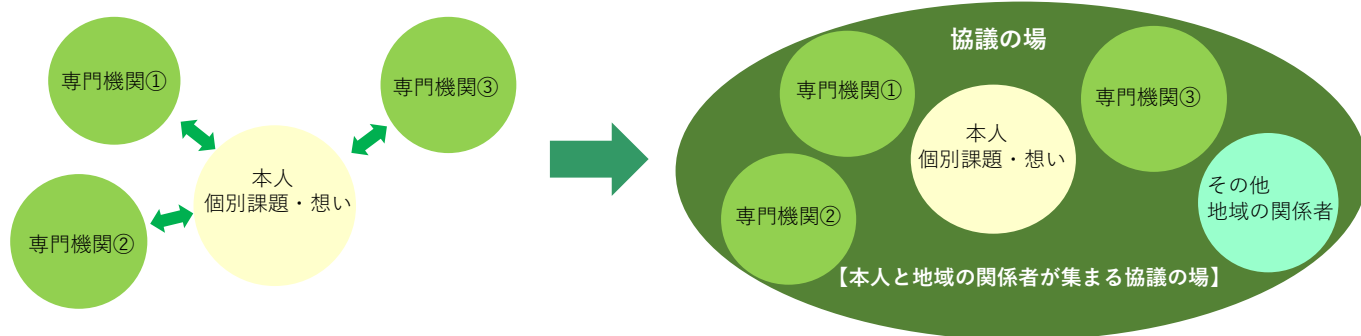
個別の支援をしながらもその課題は地域のどこかにあるし、地域の課題として解決すれば個別の支援も進むという思考が重要。

② 「地域」のアセスメントをする力（地域診断）

地域の状況（専門機関の状況、地域の地理、歴史、経済、文化、組織や人、資源となるものなど）をあらかじめ把握しておくことが大切です。

(2) 専門機関による地域連携機能

専門機関がその機能を利用者個人だけに集中させるのではなく、地域の資源も含めた全体を見て発揮することで、より効果的に地域の力を引き出す支援につながる。



上の図のように、各専門機関が本人に個別かつバラバラにかかわるのではなく、本人とその地域の関係者を含めた協議の場に積極的に参加し、地域の対応力を向上させたり、地域の資源がうまく機能したりするように支える。

※具体例は、テキスト114頁参照してください。

【専門機関による地域連携を可能とする技術】

③「地域を変革する」相談援助（地域連携による支援）

地域の関係者と積極的なコミュニケーションをとるなど、本人だけでなく本人を取り巻く地域の人々や関係者を含めて丸ごと働きかけることで地域力の向上を図ることが重要。

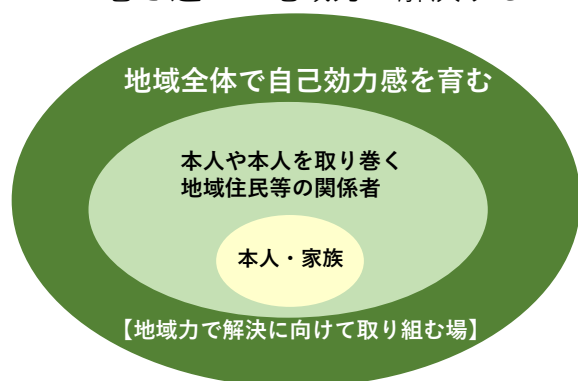
④地域生活力を向上させるアプローチ（自己決定が可能な環境づくり）

専門職主導ではなく、本人や家族の意思決定を大切にするための環境づくりが重要。

例えば、意思能力が低下した障害者の胃ろう造設の是非について、本人の生き方に照らして決め、その結果生じるサービス量の調整を前向きに進める姿勢や雰囲気づくりがこれにあたる。 11

(3) 住民主体の問題解決機能

住民や関係者を巻き込み主体化することで、個別の課題に関心を引きつけ、問題解決のプロセスに巻き込んで地域力で解決することにつながる。



左の図のように、本人の周囲を丁寧にアセスメントし、本人と本人を支える人たちの課題をもとに主体性をもって解決するプロセスを通して、両者がエンパワメントを図り、その結果として本人の地域生活を豊かなものとする。また、同時に、地域の自己効力感の向上につながる。

※自己効力感とは、簡単に言うと「自分の能力を信じる気持ち」

※自己効力感は「行動するための原動力」になる

※具体例は、テキスト115頁参照してください。

【住民主体の問題解決を可能とする技術】

⑤当事者組織化（セルフヘルプ）

同じ境遇をもつ本人や家族が協働して課題解決に取り組むことで支え合いの基礎をつくることにつながる。

⑥住民活動組織化（地域の組織化）

住民個々の活動につなげることで地域独自のサービスの担い手を作っていくこと。

⑦福祉教育（地域の理解力向上）

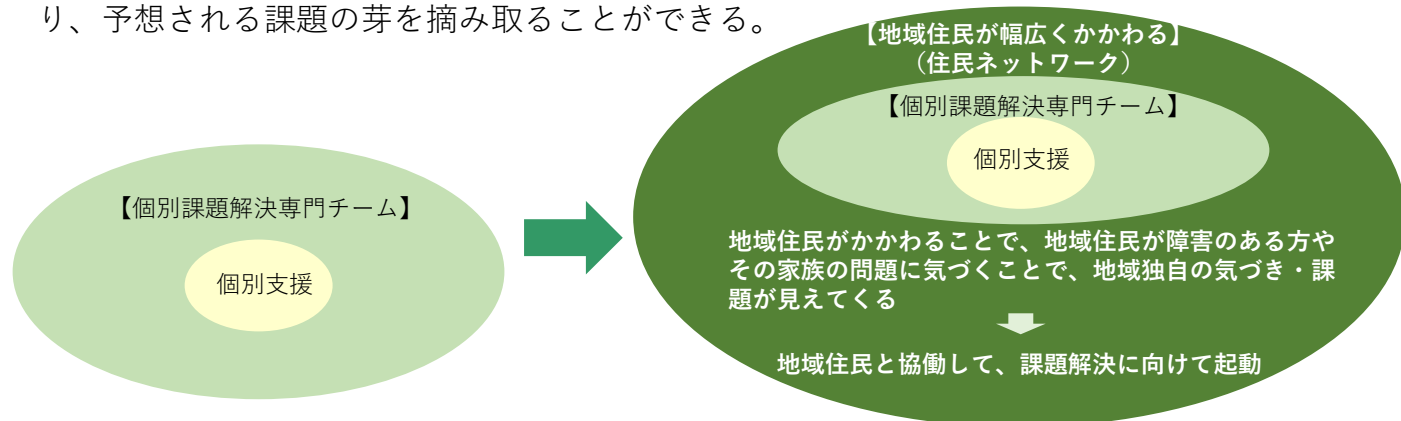
地域にある誤解や偏見を解消し、住民が地域課題を認識できるように講習会や取組の可視化を行うこと。※可視化とは、そのままでは目に見えないものに形を与えて見えるようにすること。

⑧支援ネットワークづくり（地域支え合いの輪づくり）

個別の問題を住民が中心となって発見・対応・見守りにつなげていくために本人を中心とした小さな支援の輪をつくることである。

(4) 予防的地域課題解決機能

地域で起こりそうな問題を事前に防ぐものである。地域での問題発覚や解決機能の向上により、予想される課題の芽を摘み取ることができる。



上の図のように、個別支援のつながりは、本人専属的になりやすいが、（地域懇談会などを通して）そこに幅広く地域住民がかかわることで、住民のネットワークが課題の発見や見守りなどの福祉的なかわりを果たし、かかわったことで、今まで気づかなかった問題に気づき、次の課題解決に向けて起動していく。〔※具体例は、テキスト116頁参照してください。〕

【予防的地域課題解決をを可能とする技術】

⑨地域ケアシステム（大きなケアマネジメント）

地域包括支援センターや基幹相談支援センターの圏域において、課題発見→ケア会議→介入→見守りを行う仕組みを作ること。

⑩市町村の計画的な行政推進（制度とマンパワーの向上）

市町村において、地域福祉計画等により地域ケアシステムを支える人材確保・育成・システム支援を進める。

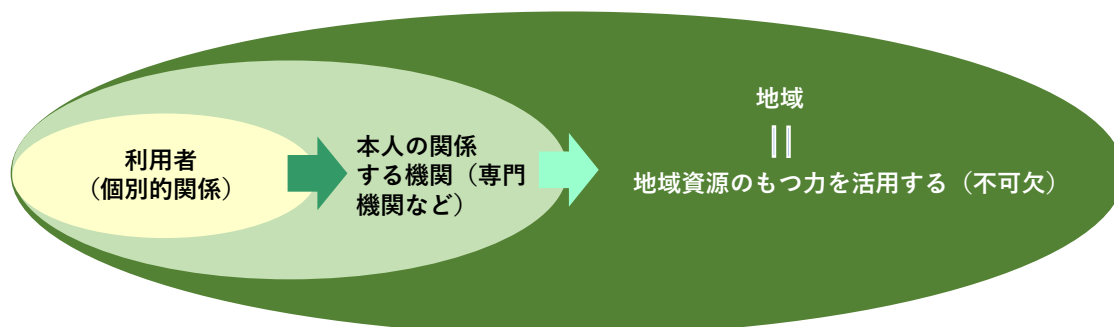
専門機関、行政、地域住民等（本人、家族含む）の各々が人任せにせず、共に考えることに気づき、行動することが最も重要。

13

3. 地域援助技術としてのコミュニティ・ソーシャルワーク

コミュニティ・ソーシャルワークは、個に対する支援と個を支える地域をつくる援助を同時並行で行うもの。

そのためには、下の図のように、個別的关系から視点をひろげて、利用者を取り囲む地域まるごとかかわる必要がある。



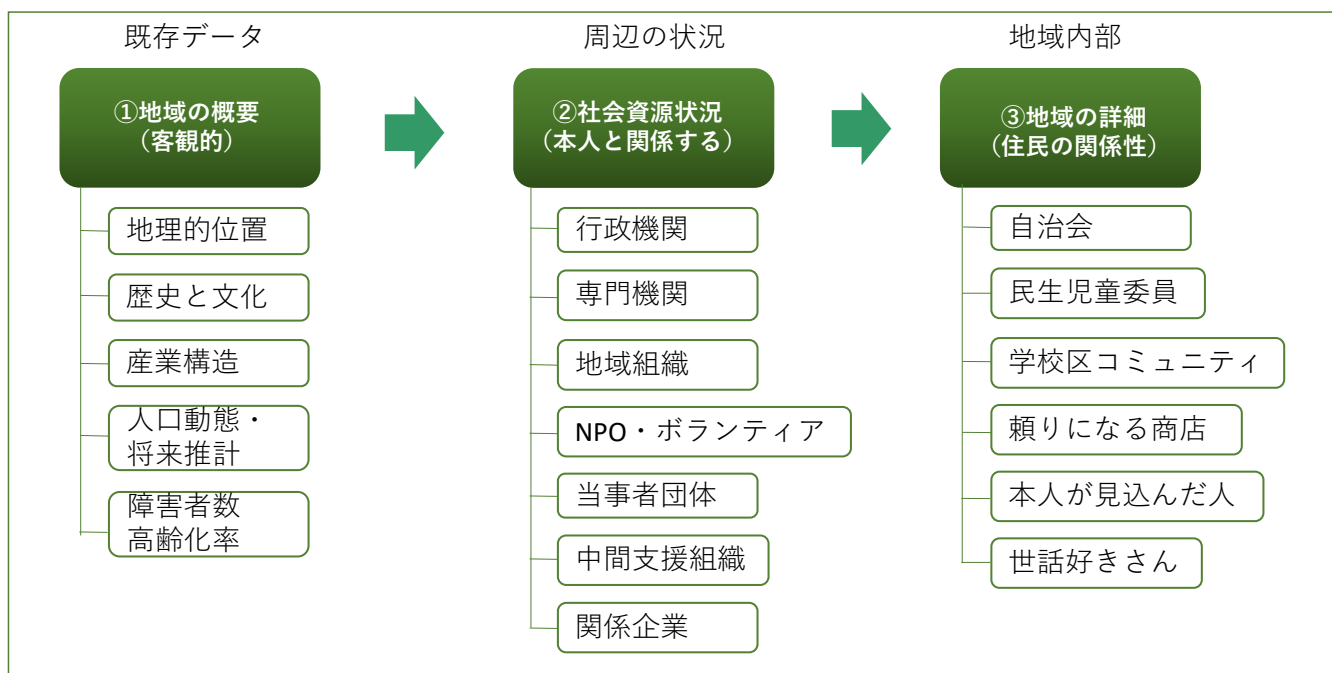
この項目では、どのようにして地域資源の力を引き出しながら利用者の想いを実現していくのかという、コミュニティ・ソーシャルワークの具体的な進め方を説明したいと思います。

14

① 地域アセスメントの方法

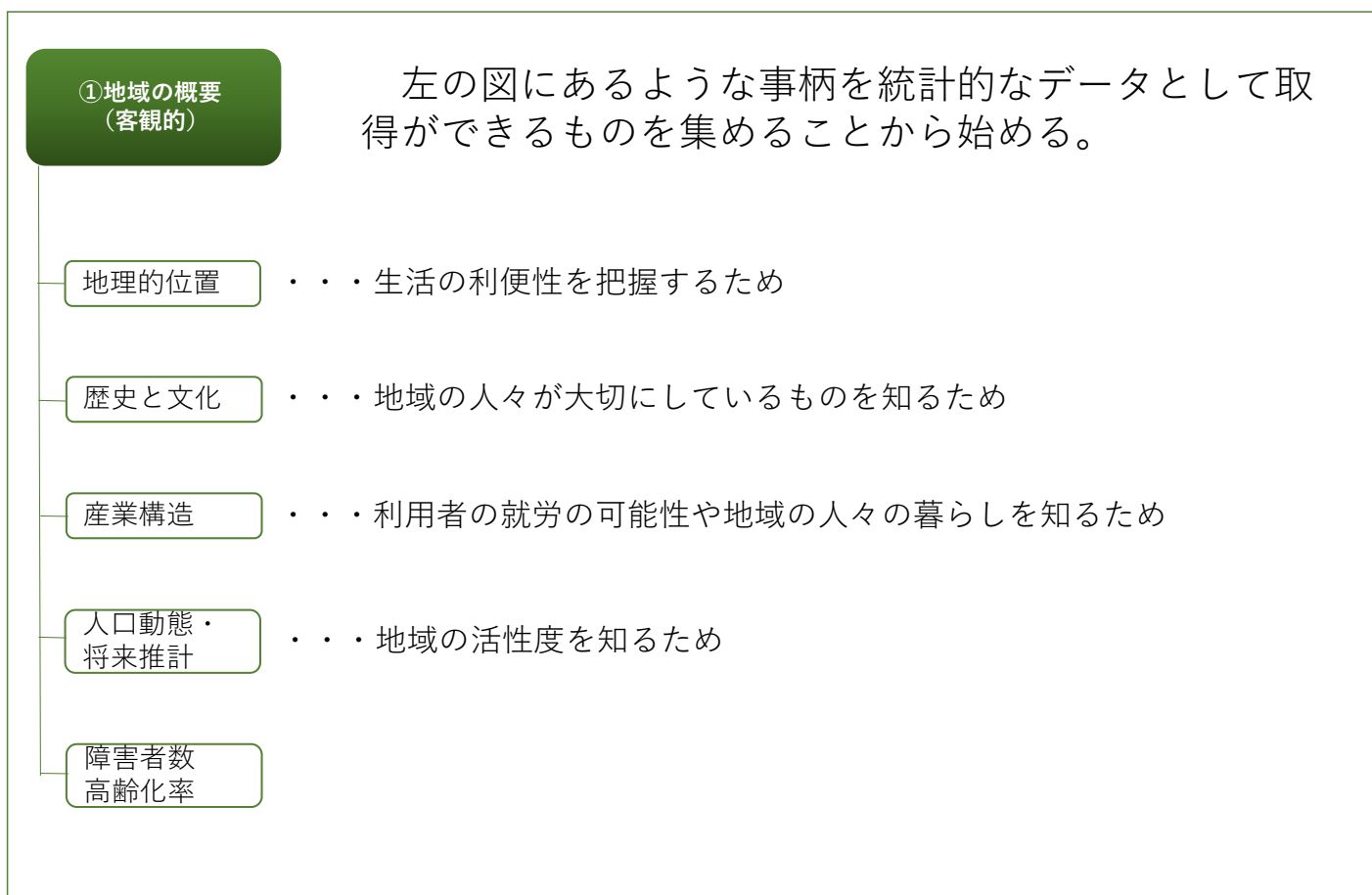
個別支援のアセスメント～簡単に言うと「利用者やその環境などの情報収集と分析（アセスメント）」ということになるが、コミュニティ・ソーシャルワークでは**地域の状況をしっかりと把握したうえで、利用者と地域との関係性に着目しながら、**図2-7の順でアセスメントを進めていく。

図2-7 地域アセスメントの手順



出典：「相談支援従事者研修のプログラム開発と評価に関する研究（研究代表者：小澤温）」平成28年度～29年度総合研究報告書、92頁を一部改変

① 地域の概要を把握する (既存データ)



② 地域の社会資源の状況を把握する（周辺状況）

②社会資源状況 (本人と関係する)

行政機関

専門機関

地域組織

NPO・
ボランティア

当事者団体

中間支援組織

関係企業

左の図にある地域で活動している関係機関（行政、専門機関）、NPOやボランティア、当事者団体、団体や個人を支援する中間組織、福祉などに協力的あるいは活動的な企業）の**活動内容や担当者**を把握する。（例：図2-8・表2-8）

※関係機関と専門職の例（図2-8）、地域資源の例（表2-8）は、テキスト118頁、119頁をご参照ください。

活動内容や担当者を把握することの重要性

機関や団体の住所や連絡先は行政機関やWEB上でも取得できるが、実際に行っている活動や詳細な条件などは出向いて聞かなければならないため、担当者との顔つなぎもかね、**訪ねることは連携した支援を行う上で非常に重要**です。

直接担当者と会うということは、意見交換から多くの地域の情報が得られるだけでなく、地域が抱える課題や資料にはない**資源が見つかる**こともあるし、その担当者が持つ**地域資源を紹介**してもらうこともできる。利用者が特定できているなら、具体的な**かかわりがどの程度可能なのかなどを探る重要な機会**となります。

※訪ねることにつながり、つながることで地域とつながるチャンスができる。（つながりの連鎖）

17

③ 利用者がかかわる地域の詳細について把握する（地域内部）

③地域の詳細 (住民の関係性)

自治会

民生児童委員

学校区コミュニティ

頼りになる商店

本人が見込んだ人

世話好きさん

左の図にある利用者が**生活するうえで直接かかわる**地域住民や自治会といった人たちとの関係性を知ることが最後の段階となります。

この段階では、**人々のつながりに踏み込むことになるので、利用者はもちろん、地域住民らとある一定の関係性がなくては、不信感のある中では、安易に進められません。逆に良好な関係性を損なう結果になることも考えられます。**

つまり、**事前に何らかの接点をもっておくことが必要**であると考えられます。事前の接点を持つための具体的な方法として、②でお伝えしたように、まず出会う機会をつくるために、地域の会合などに参加したり**（訪ねる）**、②でできた出会いから、地域の関係者を紹介してもらい、**訪ねる**などが有効ではないかと思えます（訪ねる＝つながりを作る＝積極的な人脈作り）。

※地域アセスメントの具体的なアセスメント項目例がテキスト119頁、表2-9に示してあるのでご参照ください。

(2) 地域を巻き込んだ支援会議

計画相談支援にあたる相談支援専門員は、サービス等利用計画案作成後→支給決定後にサービス担当者会議（サービス提供者会議）を開催する。

（利用者の想いや目標の共有と役割分担等）

コミュニティ・ソーシャルワークにおける支援会議は、必ずしもサービスの調整だけを目的としておらず、ソーシャルサポート・ネットワークを活かして住民全体で地域の福祉課題を解決する力を引き出すかが目的となる。

支援会議での話題の中心は、利用者の支援にとって必要な地域資源の活用や住民の協力を得ることになる。

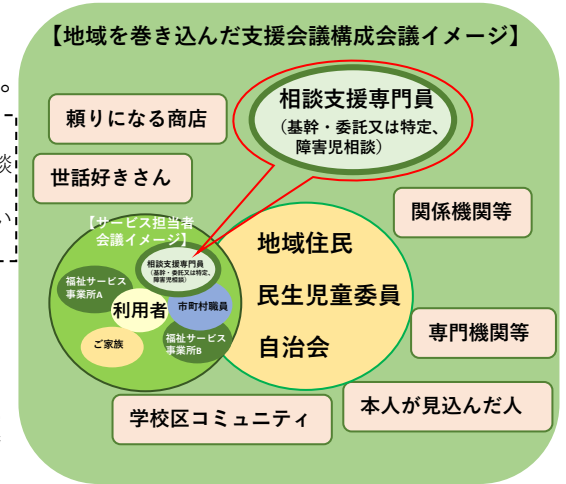
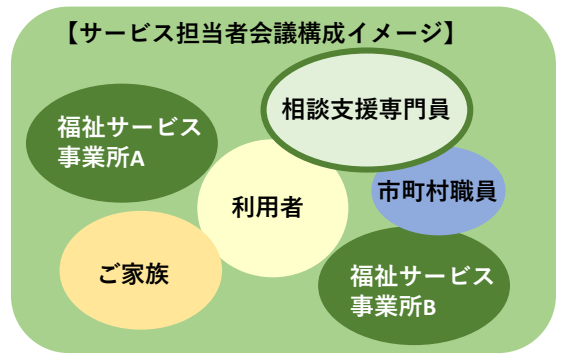
したがって、利用者のニーズが福祉サービスを伴わない場合もある。

※福祉サービス利用がない場合は、基幹または委託事業所の相談支援専門員が参加することになると思われるが、支援の結果、福祉サービスに至る場合は、特定、障害児相談の相談支援専門員も参加する。（福祉サービス利用の潜在的ニーズがある場合は、支援会議に参加することが望ましいと思われる。）

- ◎ 地域を巻き込んだ支援会議を行う場合は、地域の横のつながりがあるメンバーで利用者の地域生活を支えるという想いを共有できる場とするために、相談支援専門員は、キーマンとの綿密な調整と、参加者全員に事前に十分に趣旨を説明しておくことが重要である。

※支援会議に参加するメンバーも多彩で、利用者を支える地域のキーマンのほか、自治会長や民生委員やテーマや課題に応じて、様々な人や機関が参加する可能性がある。想定される参加者と支援会議のイメージについては、テキスト120頁の図2-9を参照してください。また、支援会議を円滑に進めるための注意点は、テキスト121頁の表2-10を参照してください。

※サービス等利用計画は、生活全般をアセスメントし、本人の願いを中心に、生活や支援の全体像を示すものであることから、障害福祉サービス利用は必須であるが、障害福祉サービスではないが生活上で支援する人、モノ、場所（サービス等の等の部分）も記載し、サービス担当者会議への参加も促していくことが必要である。



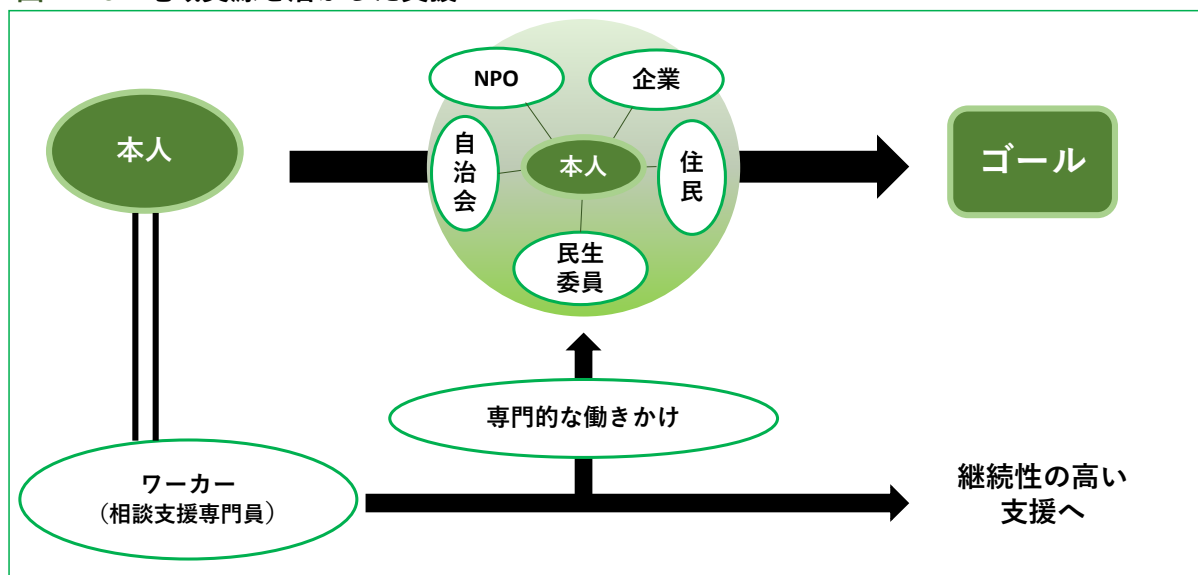
(3) 地域資源を活かした支援方法

地域資源を活かした支援とはどのようなものか？



相談支援専門員の業務として、相談援助をする中で、本人だけでなく、本人が生活を営む地域などで、本人を取り囲むさまざまな人や組織（地域資源）といった関係性をも含めてかかわりを持って支援すること。

図2-10 地域資源を活かした支援



出典：岩間伸之・原田正樹「地域福祉援助をつかむ」有斐閣、53頁、2012. を一部改変

相談支援専門員による専門的な働きかけは、単なる個別支援とは異なるものであり、その注意点を3点にまとめています。

① 地域にもともとある支え合いを活かす

地域： 地域には自治会や住民同士でもともと行っている支え合いの仕組みが必ずある。

障害児者： 障害を抱えるとその輪のなかから外れてしまうことが多くある。また、民生委員や児童委員、福祉委員など地域を見守る立場の人とも関係が切れていることが多い。（そういった傾向が伺える。）

相談支援専門員： 利用者が地域の人々とどのような関係にあるかをアセスメントし、利用者の了解を得て、利用者やその家族と地域の人たちをつなぐ（つながりの再構築）役割を果たす。

目指すもの： 地域の構成員として、地域との関係の再構築を行い、利用者の孤立を防ぎ、自分の居場所や役割を見出すことで、パワーを引き出す。

② 地域の既存の団体を活性化させる

地域： 自治会などが高齢化により担い手不足など、さまざまな課題を抱えていることが多い。

障害児者： 自治活動から切り離されている、または参加の方法や受け入れ側の接し方など双方の不安要素から参加できていない。（そういった傾向が伺える。）

相談支援専門員： 地域の既存の団体の強みと課題を知り、障害のある方々が担い手になる可能性を見出し、できることから始めてみる。
自治会などに成功事例を紹介するなどの工夫も重要となる。

目指すもの： 地域の中で、利用者の活躍の場を見出していくことで、利用者の自己実現と地域の活性化も図る。

21

③ 新たな目的をもった活動を生み出す

地域： 地域の中に利用者の想いを実現できそうな資源が見当たらない。

障害児者： 自分自身が起点となって地域を変えていく。資源の開拓をするという発想。

相談支援専門員： 地域にある使われていない資源に目を向け、利用者が使える地域資源に変えてく発想。（地域の人、モノのつながりの再構築＝資源開発）

目指すもの： 地域の中で、利用者が新たな活動により地域の変革と本人の自己実現。

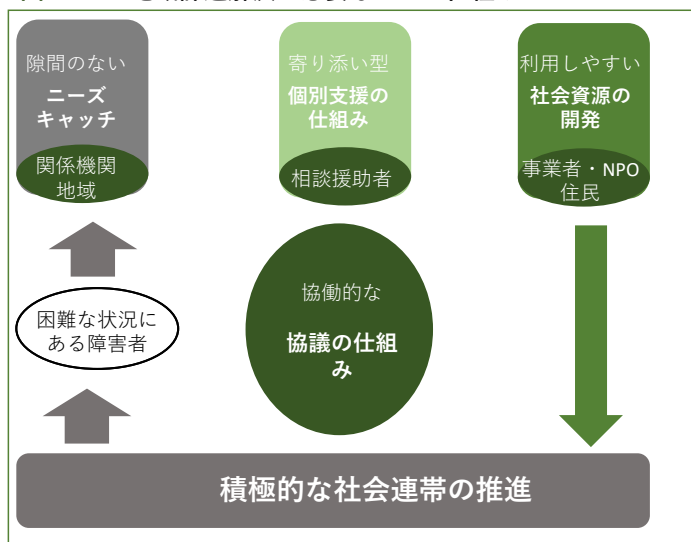
(4) おわりに

コミュニティー・ソーシャルワークを進めていくということは、

- ・ 隙間のないニーズキャッチ
- ・ 寄り添い型の個別支援の仕組み
- ・ 利用しやすい社会資源の開発
- ・ 協働的な協議の仕組み
- ・ 積極的な社会連帯の推進

といった仕組みを地域のなかに成立させていくことに他ならない（図2-11）。

図2-11 地域課題解決に必要な5つの仕組み



出典：「相談支援従事者研修のプログラム開発と評価に関する研究（研究代表者：小澤温）」平成28年度～29年度総合研究報告書、97頁を改変

これらは、決して相談支援専門員が個々に行うものでなく、ニーズキャッチは本人がかかわっている関係機関や地域住民が行い、社会資源の開発は関係の近い事業所や自治会、NPOが中心となるといった**役割分担**が行われる。また、地域包括支援センターの職員や社会福祉協議会のコミュニティー・ソーシャルワーカーとは困難な課題を抱えた利用者や家族に同時に対応する可能性が高く、地域にともにかかわることが必要となるため**普段からの関係づくりが大切**である。

相談支援専門員は、あくまでも**利用者のエンパワメントを図ることが使命**であり、**これらの職種と住民の協力を本人の自己実現に活かす**ことを目指していただきたい。もちろん、それが**地域の変革につながることで本人のさらなるパワーアップとなる**ことが、**地域を基盤としたソーシャルワークの目指すところ**であることを忘れてはならない。

23

ご清聴ありがとうございました

参考文献

遠藤英俊監修『2訂／介護支援専門員研修テキスト 主任介護支援専門員研修』（第6章「地域援助技術」）、一般社団法人日本介護支援専門員、2016。

24